ルーマニア語の間接話法における時制の照応の仕方について*
―― アガサ・クリスティ短編集の英語原文とルーマニア語訳文の対応関係をもとに ――

鈴木　信吾

1. はじめに

ルーマニア語の間接話法は、いわゆる「時制の一致」という現象を起こさないか、あるいは、起こしたとしても必須ではない、という状況にある。本稿は、こうしたあいまいとも言える状況を少しでも解明していくための糸口として、時制の一致の規則をもつ英語からルーマニア語に訳されたテクストをもとに、ルーマニア語翻訳版の間接話法における時制の照応の仕方にどういった形式上の特徴が見られるかを探究しようとするものである。

方法としては、まず、英語と対照しながら、ルーマニア語における一般的な時制の照応の仕方がいかなるものかを見る（第 2 節）。次いで、ルーマニア語の未来と過去未来の形式の特殊性を考慮し、これらの迂言形式について説明しておく（第 3 節）。そののちに、科研費（下の脚注 * を見よ）の助成金による共同研究の一環として作成されたパラレルコーパスのうち、とりわけ英語オリジナル版とルーマニア語翻訳版とを使い、まず、ルーマニア語版で、伝達動詞が過去に置かれた間接話法中の動詞がどのような時制で現れるかを見る（第 4 節）。最後に、これらの時制が英語原文の時制とどのような対応関係にあるかを調査し、そこにどの程度英語の時制の一致の規則が影響しているか（あるいはしていないか）を、具体的な数字を示しながら探究していきたい（第5節）。

2. ルーマニア語の間接話法における時制の照応の仕方

英語や、西側のロマンス諸語（イタリア語を含む）には、一般に時制の一致という統語的な制約がある。たとえば、Comrie は、英語の時制の一致の基本概念を示すに当たり、手始めに「予備バージョン（preliminary version）」として次のような規則をあげている。

引用 1　“If the tense of the verb of reporting is non-past, then the tense of the original utterance is retained; if the tense of the verb of reporting is past, then the tense of the original utterance is backshifted into the past” (Comrie, 1986, p. 279).

* 本稿は、科学研究費助成事業（課題番号 15K02482「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」研究代表者：山村ひろみ）により助成を受けて行われた研究の成果のうちの 1 つである。

この規則にある後半部分、つまり、支配節における伝達動詞の時制が過去である場合については、同じ Comrie の次の例を見ることにより、間接話法で伝えられる発話の元の時制が過去に向かって移し替えられることが確かめられる。

(1) Andrew said that he **was** sick (although he now claims to be better) (Comrie, 1986, p. 278)

例文(1)の間接話法を介して伝達されるアンドルーが発した元の表現は "I **am** sick" であったと考えることができるが、元の am の時制が現在形であったということは、アンドルーの病気が彼の発話と（部分的にであれ）同時関係にあることを示している。つまり、英語の間接話法では、支配節の動詞が過去（(1) の said）の場合、同時関係を表す現在形という時制は過去形（(1) の太字 was）に置き換わって伝えられるのが基本である、と言うことができる。[1]

伝達動詞の時制が過去という条件下では、間接話法で伝えられる状況が先行関係や後続関係にあっても、(1) の同時関係の場合と同様に、その伝えられる状況を表す時制が過去に向かって移し替えられる。

(2) Yesterday, Beryl said to Charles that he **had kissed** her the day before yesterday, and that she **would kiss** him today (Comrie, 1986, p. 266)

(2) の過去完了（太字の had kissed）と法助動詞過去を使った迂言形式（同 would kiss）で伝えられる元の発話の典型としては、それぞれ "You **kissed** me yesterday", "I **will kiss** you tomorrow" が考えられる。これらからわかるのは、支配節が過去の英語の間接話法では、同時関係を示す現在形が過去形に置き換えられるのと同様に、先行関係を示す過去形は過去完了に、また、後続関係を示す未来形は過去未来を表す迂言形式に置き換えられるのが基本だ、ということである。[2] つまり、Comrie の言うとおり、伝えられる発話の元の時制が過去に向かって移し替えられている、ということになる。

これに対し、ルーマニア語の間接話法においては、Comrie が言うような過去への移し替えは必須ではない。たとえば、英語の (1), (2) に対応するルーマニア文は、従属節の動詞を過去に向かって移し替えることなく、元の話者が用いた時制のまま、そ

---

[1] もう 1 つ、元の話者アンドルーの直示中心から見た代名詞 I「私」も、(1) では、アンドルーの言葉を伝える者の視点に置き換えられて he「彼」となっているが、直示中心の移動に伴うこうした代名詞や、副詞（例：本文 (2) の today。これは、元の発話中の tomorrow が転じたもの）の置き換えについては、ルーマニア語も大きく変わるところがないので（Vântu, 2008, pp. 865-866 を参照）、本稿では扱わない。

[2] ただし、ここにあげた置き換えは、あくまでも基本的なものである。直接話法と間接話法が必ずしも 1 対 1 で対応するとは限らないことについては、Comrie (1986, pp. 267-268) を参照。

れぞれ(3), (4)のように言うことが可能である。[3]

(3) Andrei a spus [PC] că **este** [PRES] bolnav (dar acum se simte mai bine)
「アンドレイは自分が病気だと言った（が、今は気分が良くなっている）」

(4) Ieri, Maria i-a spus [PC] lui Ion că el **a sărutat**-o [PC] alaltăieri, și că ea îl **va săruta** [FUT] azi
「昨日、マリアはイオンに、彼が自分に一昨日キスしたが、自分は彼に今日キスするだろう、と言った」

主節の動詞はいずれも複合過去（a spus）であるが、それにもかかわらず、従属節の動詞は、それと同時関係にあるなら現在形（(3)の太字 este）、先行関係なら複合過去（(4)の太字 a sărutat）、後続関係なら未来形（同 va săruta）のまま据え置かれている。つまり、英語と違って、ルーマニア語では、直接話法の時制をずらさずにそのまま使うことができる。これは、誰かの言葉を伝達しようとする者（以下「伝達者」と呼ぶ）が自分の視点とは別に、元の話者の視点をもとにして時制を選ぶことを意味する。言い換えるならば、元の話者が使った時制が、直示的にではなく、支配節の動詞の示す時間を基準点として照応的に用いられることを意味する。ルーマニア語の間接話法がもつこうした特性を、Zafiu は次のように説明している（引用中の例文番号は、本文からの通し番号に変更する）。[4]

引用 2 “In Romanian, verbal tenses in subordinate clauses are used as relative, not as deictic tenses: their temporal interpretation relates to the reference point in the matrix clause, not directly to the moment of utterance.

That is why temporal forms in reported speech may remain the same as those in direct speech, only with a difference in meaning.

Thus, the present tense shows partial simultaneity with the events in the matrix clause (5a); the future tense (5b) or the present tense with future meaning (5c) shows posteriority, and the compound past shows anteriority with respect to the time of the matrix clause (5d):

---

[3] ルーマニア語（とフランス語）例文中での動詞の時制を示す略号は以下のとおり：FUT「未来（future）」、IMP「半過去（imperfect）」、PC「複合過去（Fr: *passé composé*）」、PQP「大過去（Fr: *plus-que-parfait*）」、PRES「現在（present）」、PS「単純過去（Fr: *passé simple*）」。以上は直説法の場合であるが、条件法には C.（= conditional）を、接続法には S.（= subjunctive）を、それぞれ時制の前に付けて示す：C.PRES「条件法現在」、S.PRES「接続法現在」など。なお、ルーマニア語には迂言形式による過去未来の表示法があるが（第 3 節参照）、この迂言形式は特に FdP（= Fr: *futur du passé*）で表すこととする。

[4] Zafiu の例文も含め、本稿の例文の注解に使用する略号は以下のとおりである（脚注 3 も参照のこと）：AUX「助動詞（auxiliary verb）」、CL「接語（clitic）」、DAT「与格（dative）」、INF「不定詞（infinitive）」、PL「複数（plural）」、SG「単数（singular）」。

(5) a. Mi-a spus că **e** supărat
CL.DAT.1SG-has told that is angry
'He told me that he was angry'
b. Andrei mi-a spus că **va pleca** la Brașov
Andrei CL.DAT.1SG-has told that AUX.FUT.3SG leave.INF to Brașov
'Andrei told me that he would leave for Brașov'
c. Andrei mi-a spus că **pleacă** la Brașov
Andrei CL.DAT.1SG-has told that leaves to Brașov
'Andrei told me that he would leave for Brașov'
d. Mi-a spus că **a lipsit** o lună
CL.DAT.1SG-has told that has been away a month
'(S)he told me that he had been away for a month'

This type of construction does not allow inferences about the external deictic system, that is, about the situation in the moment of utterance: (5a) does not imply 'he is still angry'" (Zafiu, 2013, p. 63).

Zafiu は、この説明の最後の部分で、「この型の構文では、外的な直示体系について推測することはできない（This type of construction does not allow inferences about the external deictic system）」と言っている。それは、元の話者の直示中心から見た時制が、その外にある伝達者の視点に合わせて転換されていないからである（(3) に太字の現在時制で示したアンドレイの病状が、(3) の発話時の健康状態と異なることにも注意）。

ところで、**引用2** のすぐ後で、Zafiu は次のように続けている。

引用3 "Thus, the unmarked option is to use deictic tenses as anaphors, related to the internal reference frame [...]; the option for specific relative tenses (the imperfect, the future in the past, the pluperfect) is possible, but this is the marked option, which presupposes a supplementary reference to the moment of utterance or to another reference point:

(6) a. Mi-a spus [PC] că **era** [IMP] supărat
'He told me that he was upset'
b. Mi-a spus [PC] că **avea să plece** [FdP] la Brașov
'He told me that was going to leave for Brașov'
c. Mi-a spus [PC] că **lipsise** [PQP] o lună
'He told me that he had been away for a month'

From example (6a) it can be inferred that 'he is not upset anymore'. The pluperfect in example (6c) is ambiguous, because the implicit reference point of the pluperfect is not necessarily the present tense of the internal frame" (Zafiu, 2013, pp. 63-64).

Zafiuに従えば、例文(5)の現在形、未来形、複合過去のように「直示時制を照応的に用いる（to use deictic tenses as anaphors）」のは無標の選択であるにすぎず、実は、ルーマニア語にはもう1つ別の、有標の選択がある、ということになる。「特定の相対時制（半過去、過去未来形、大過去）の選択（the option for specific relative tenses (the imperfect, the future in the past, the pluperfect)）」がそれに当たる。[5] この場合は、元の発話中の時制が過去に向かって移し替えられるわけで、時制にいわゆる「一致」が生じることになる。つまり、英語やフランス語、イタリア語のように時制を一致させることは、ルーマニア語では有標の選択になるのである。

3. ルーマニア語における未来と過去未来の形式

ここで、ルーマニア語の未来と過去未来の形式が西のロマンス諸語とはかなり異なることを考慮し、少しわき道にそれるが、これらの迂言形式について説明しておく（Popescu, 2014, pp. 114-115も参照のこと）。ルーマニア語の未来形にはいくつかの分析的な形式があって、それらが社会言語学的な意味で競合し合っている。未来形に使われる助動詞は、歴史的には、いずれも叙法的な意味をもつa vrea「…したい＜欲する」あるいはa avea「…せねばならない＜持つ」に由来する（Zafiu, 2013, p. 38）。① **VOI型**。もっとも標準的な未来形は「a vreaの縮約形（1SGから順に、*voi, vei, va, vom, veți, vor*）+ 原形不定詞」で形成される（例：voi cânta「私は歌うだろう」。例文(5)bの太字も同様）。本稿ではこれを「VOI型」と呼ぼう。なお、この型の助動詞から子音vが落ち、時に母音にも揺れのあるバリアントが存在するが、これの使用は俗っぽくくだけた調子を伴う。② **O SĂ型**。これは口語でよく使われ、「o + 接続法現在」で作られる（例：o să cânt「私は歌うだろう」）。助動詞のoはa vreaの縮約形が固定したもので、全人称にわたって不変である。これは「O SĂ型」と呼ぶ（sămは接続法の標識）。③ **AM SĂ型**。これも口語的な未来形で、「a aveaの現在（*am, ai, are, avem, aveți, au*）+ 接続法現在」で作られる（例：am să cânt）。最後にあげたAM SĂ型未来形は、Zafiuによれば、「完全には文法化していないので、助動詞a aveaには（複合過去で短縮形が使われるのと対照的に）音韻的な縮約がないし、必要性を示す元来の叙法的意味が部分的に残っている（[this type] is not fully grammaticalized: the auxiliary is not phonologically reduced (in contrast to the short forms in the compound past), and it partially preserves

---

[5] ルーマニア文法は、発話時点のみに視点があるかどうかで、伝統的には2つの時制群を区別してきた。この区別は「絶対時制／相対時制（timp absolut / timp relativ）」という対をなす用語で呼び習わされてきた（たとえば、アカデミー文法旧版GAのVasiliu, 1963, p. 234）。一方、Zafiuは、下に見るように、伝統的な用語に加えて「直示時制／照応時制」の呼び名も併用している（こうした呼び名のバリエーションとその問題点については、アカデミー文法新版GALRのManea, 2008, p. 401も参照のこと）。

"Only the indicative has a complex series of tenses. The absolute (deictic) tenses are: the present, the simple past, the compound past, and the future. The relative (anaphoric) tenses are: the imperfect, the pluperfect, and the future perfect. Absolute tenses have also certain anaphorical uses, with reference points which differ from the speech time" (Zafiu, 2013, p. 55).

the original modal meaning of necessity)」(Zafiu, 2013, p. 39)という。

一方、ルーマニア語で過去未来を表すのには、西のロマンス諸語のように条件法は使われない。[6] 条件法とは別に、もっぱら過去の文脈にのみ現れて後続関係を示す迂言形式が2つ存在する。① **AVEAM SĂ 型**。これは、AM SĂ 型未来形をモデルに「a avea の半過去(*aveam, aveai, avea, aveam, aveați, aveau*)+ 接続法現在」[7] で形成される(例(6)bと(7)aの太字部分)。② **URMA SĂ 型**。もう1つの迂言形式は、a urma「…という結果になる<後に続く」を助動詞に使って「a urma の半過去(3SG *urma*)+ 接続法現在」で作られる(例(7)b)。ここでの a urma は非人称動詞である(Manea, 2008, pp. 441-442)。[8]

(7) a. **aveam** **să** **plec** (Zafiu, 2013, p. 40)
have.IMP.1SG SĂ leave.S.PRES.1SG
'I was going to leave'
b. **urma** **să** **plec** (*loc.cit.*)
follow.IMP.3SG SĂ leave.S.PRES.1SG
'I was about to leave'

Zafiu は、**引用3**で、半過去や大過去といっしょに並べることにより、過去未来形があたかもルーマニア語の時制体系のなかに組み込まれているかのような論じ方をしているが、彼女自身、同じ著作のなかで「過去未来は、文法化の不十分な迂言形式である(The future in the past is an insufficiently grammaticalized periphrastic form)」(Zafiu, 2013, p. 40)と言っている。Timoc-Bardy は、さらに踏み込んで、文法化に至っていない可能性さえ示唆している。

---

[6] ルーマニア語の間接話法のなかで条件法が使われるとすれば、それは、仮定・帰結 (i) や伝聞 (ii) など、条件法が本来の(あるいはそれを発展させた)法としての価値をもつ場合に限られる。条件法が過去未来の価値をもつことはない。

(i) Știam [IMP] că **ai pleca** [C.PRES] dacă **ai putea** [C.PRES] (Timoc-Bardy, 2013, p. 59)
「我々は、もしできるなら出発するのに、という君の状況を知っていた」

(ii) Spuneau [IMP] că **ai pleca** [C.PRES] în curând (*ibid.*, p. 60)
「彼らが言うには、君は間もなく出発するということだった」

[7] ルーマニア語の接続法は半過去、大過去をもたない。したがって、直説法の場合のように相対時制を照応させるという有標の選択肢自体がない。次の例でも、主節の複合過去に対して、接続法は現在形である(例文引用の末尾に示してある□に囲まれた数字については、脚注16参照)。

(i) Mi-a spus [PC] **să-i scriu** [S.PRES] (MR, p. 119)
「彼女は、手紙を書くよう私に言いました」(*cf.* MJ, p. 183) 1906

なお、ロマンス諸語(特にフランス語とイタリア語)の接続法を含む時制の一致に関しては、Begioni & Rocchetti (2013) を参照。

[8] ただし、接続法に置かれた動詞の主語が3人称の場合に限って、助動詞の a urma の人称・数をそれに一致させることがある。(i) は主語が3人称複数である。

(i) **urmau** **să** **viziteze** ceea ce doreau **să** vadă (MR, p. 141)
follow.IMP.3PL SĂ visit.S.PRES.3PL what want.IMP.3PL SĂ see.S.PRES.3PL
'They would [...] see what they wished to see' (ME, p. 162)
「彼女らは、見たいと思ったものを見物しようとしていた」(*cf.* MJ, p. 219) 2313

引用4 “À la différence des « temps » verbaux composés proprement dits, l’auxiliaire de ces périphrases est bien moins (ou pas) grammaticalisé. Réservées au registre écrit soutenu, surtout littéraire, elles peuvent être considérées comme tout à fait marginales par rapport au système” (Timoc-Bardy, 2013, p. 59, note 13).
「本来の動詞の複合『時制』とは違って、これらの迂言法は、助動詞の文法化がずっと遅れている（または、始まっていない）。これらは、とりわけ文学的で格調高い書きことばの使用域にとどまっているので、体系に対して全く周辺的なものと見なし得る」。

本稿では、以下で説明する迂言形式を「過去未来形」と称して（**引用3**でZafiuがやっているように）他の時制と同列に論じはするが、それは、ルーマニア語の時制の照応の仕方を記述するに際し、煩雑さを避けるための方便に過ぎない。ルーマニア語の過去未来形に文法化が進んでいないことは、いつも心にとめておく必要がある。

4.『火曜クラブ』ルーマニア語翻訳版MRにおける時制の照応の仕方

これから、アガサ・クリスティ（Agatha Christie, 1890-1976）のミス・マープルのシリーズより『火曜クラブ（*The thirteen problems* 別題：*The Tuesday Club murders*）』全13話をもとに作成された、7言語（6ロマンス諸語＋英語）パラレルコーパスのなかから、まずルーマニア語をとりあげ、この翻訳版MRにおいて、補足節[9]を支配する動詞のうち、直説法のいずれかの過去形に置かれた主要なものをピックアップし、[10]その補足節の動詞の時制を調べた。そのうえで、補足節の動詞が直説法に置かれている場合、現在、半過去、複合過去、大過去、未来、過去未来の6つの時制がどれぐら

[9]「補足節」という用語は必ずしも定義が一定しないが（ELR, p. 105, “complemente şi propoziţii completive” の項を見よ）、我々がここで対象とするのは、主として「直接補足節（propoziţie completivă directă）」（*loc. cit.*）である。これに加えて、支配節の動詞が受け身的に使われることにより、その機能が本来の直接目的語から主語に転じた従属節（例：S-a presupus *că omorul a fost comis pe la şapte fără un sfert* (MR, p. 204)「殺人は7時15分前かそこらに犯されたものと考えられたんです」（*cf.* MJ, p. 324）3564；文頭の接語 s- (= se) は受動再帰の標識）、また、すでに対格をもつ動詞に支配される「二次的補足節（propoziţie completivă secundară）」（Carabulea, 2008, p. 416）（例：m-a întrebat *dacă eram de acord* (MR, p. 228)「彼は、異存がないかどうか私に尋ねました」（*cf.* MJ, p. 368）4088；文頭の接語 m- (= mă)「私」は対格）なども調査の対象に入れる。本稿では、これらをあわせて単に「補足節」と呼ぶことにする。

[10] ピックアップした支配節の動詞は次のとおり：a afla「知る」、a ameninţa「脅す」、a anunţa「告げる」、a asigura「請け合う」、a auzi「聞く」、a bănui「思う」、a confirma「確認する」、a considera「見なす」、a se convinge「納得する」、a crede「信じる」、a declara「宣言する」、a explica「説明する」、a făgădui「約束する」、a se gândi「考える」、a-şi imagina「想像する」、a insista「力説する」、a-şi închipui「想像する」、a întreba「尋ねる」、a înţelege「理解する」、a învăţa「教える」、a jura「誓う」、a mărturisi「告白する」、a nota「書き留める」、a observa「気づく」、a presupune「仮定する」、a pretinde「主張する」、a promite「約束する」、a răspunde「答える」、a recunoaşte「認める」、a regreta「残念がる」、a reproşa「とがめる」、a scrie「書く」、a simţi「感じる」、a spera「望む」、a spune「言う」、a sugera「示唆する」、a susţine「主張する」、a şti「知っている」、a se teme「恐れる」、a vedea「見る」、a zice「言う」。

いの頻度で現れるかを数え上げた。数え上げるに当たり、これら6つの時制を、支配節の時間に対して①同時関係（または後続関係）を示す現在形と半過去、②先行関係を示す複合過去と大過去、③後続関係を示す未来形と過去未来形という、3種類のペアに分けた。それぞれのペア中の2つの項は、元の話者が用いたままの時制か、過去に向かって移し替えられた時制か、という点で互いに対立し合っている。次の表が6つの時制の出現数を記したものである。カッコ内の数字は、各ペアの内部でそれぞれの対立項が占めるパーセンテージ（小数点第2位以下四捨五入）である。

表１　ルーマニア語の（過去の文脈中での）補足節における各時制の出現頻度

	過去への移し替えなし（無標）		過去への移し替えあり（有標）	
① 同時関係[11]　計　125例	現在	46例 (36.8%)	半過去	79例 (63.2%)
② 先行関係　計　90例	複合過去	21例 (23.3%)	大過去	69例 (76.7%)
③ 後続関係　計　34例	未来[12]	30例 (88.2%)	過去未来[13]	4例 (11.8%)

この表を見てまず気づくのは、無標か有標かに基づく出現頻度の予測が、実際の出現頻度の比率と（少なくとも①と②においては）大きく食い違っている、ということである。事実、選択が無標であるがゆえに頻出しそうな現在形や複合過去は、その比率（36.8%, 23.3%）において有標の半過去や大過去（63.2%, 76.7%）をかなり下回っている。この問題は、翻訳版という性質上、時制の一致規則を有する英語のオリジナル版に引きずられた結果だと考えることで解決するのかもしれない。そうだとしても、今度は逆に、なぜ③後続関係の場合に限って、①, ②とは逆に、無標の未来形（88.2%）だけが有標の過去未来形（11.8%）を量的に大きく凌駕しているのか、が問題として残ることになる。

5. ルーマニア語版MRの動詞から見た英語版MEの動詞の時制の対応の仕方

前節で浮上した問題を究明するために、我々は、『火曜クラブ』ルーマニア語版MRの補足節で①～③の同時関係・先行関係・後続関係を示す**表1**の各時制が、同じパラレルコーパス中の英語オリジナル版MEのどの動詞に対応するかを洗い出そうと試みた。そのうえで、対応する動詞がMEでも従属節中で定形に置かれている場合に

[11]「①同時関係」には、ここで問題にする現在形や半過去が後続関係を示す場合も含める。
[12] 未来形30例の内訳は、VOI型が28例、O SĂ型が2例。AM SĂ型は皆無。
[13] 過去未来形4例の内訳は、AVEAM SĂ型が2例、URMA SĂ型が2例。

絞って、その時制を調べた。[14] その際、過去未来を表し得る法助動詞の過去形（would など）については、（ルーマニア語の AVEAM SĂ 型・URMA SĂ 型過去未来形の扱いに合わせて）他の時制と同列に扱った。

ところで、我々は、時制の一致の規則をもつ言語とルーマニア語とを対照した貴重な報告がすでに存在することを知っている。この報告は、Călărașu (1992) によるもので、ルーマニア語をオリジナルとするカミル・ペトレスク（Camil Petrescu, 1894-1957）の小説『プロクルステスの寝台（*Patul lui Procust*）』をとりあげ、動詞の直説法を対象としながら、これをフランス語の翻訳版と比較することにより、フランス語に翻訳される際にどのような時制の変更がなされているかを調査している。今回の我々の調査は、これとはむしろ逆で、ルーマニア語の方が翻訳版であり、英語のオリジナルが翻訳される際にいかなる時制の対応の仕方が見られるのかを探究するものである。

5.1. 同時関係

まず、①の同時関係（または後続関係）を示す MR の現在形と半過去から見ていこう。下の**表 2** は、MR に訳された①の現在と半過去が、それぞれ、元の ME のどの時制を翻訳したものなのか、そして、ME の個々の時制がどれぐらいの頻度で MR の現在や半過去に翻訳されるのか、を示したものである。具体的には、MR で現在と半過去に訳された ME の定形動詞の各時制が何回現れるかを、対応する MR 版の現在と半過去という 2 つの時制 (A), (B) に区分けしながら数値で表し、これらの総数（96 例）[15] に対して英語の動詞の各時制が占める割合をパーセンテージにして示した。たとえば、同じ ME の過去形であっても、MR で (A) の現在形に訳されたもの（16 例）は総数中の 16.7%、一方、(B) の半過去に訳されたもの（57 例）は 59.4%、といった具合である。

---

[14] したがって、対応する動詞が非定形の場合や、動詞自体が欠如している場合は、ME の出現リストに入れなかった（(i)E は後者の例）。また、これ以外でリストから外したものとして、MR の補語節が ME では従属節の体をなしていない場合（(ii)E は独立節）、従属節ではあってもその動詞の基準点が文脈中の過去の時間にない場合（(iii)E は支配節が現在）、などがある。

(i) R. Richard Haydon zicea [IMP] că **este** [PRES] un marinar fenician (MR, p. 35)
E. Richard Haydon called himself a Phoenician sailor (ME, pp. 36-37)
「リチャード・ヘイドンは、自分がフェニキアの船乗りだと言っていました」（*cf.* MJ, p. 48） 376

(ii) R. N-a înţeles [PC] de la început că **am schimbat** [PC] totul (MR, p. 225)
E. He didn't understand at first. I've changed everything (ME, p. 259)
「彼は、すぐには、私が全部［偽名に］変えてしまったのがわからなかったんですわ」（*cf.* MJ, p. 361） 4036- 4037

(iii) R. ea a pretins [PC] că i-**au fost** [PC] furate bijuteriile (MR, p. 236)
E. she pretends the jewels are stolen (ME, p. 273)
「彼女は、自分の宝石が盗まれたと言い張ったのよ」（*cf.* MJ, p. 380） 4257

[15] 96 例という数字が**表 1** の①の合計 125 例よりも少ないことについては、脚注 14 を参照。

表２　①同時関係：MR で現在形、半過去に訳された元の ME の時制

MEの時制	出現数（計96例）	計96例中の割合	備考
(A)　MRで現在形に訳されたMEの定形動詞（29例）の時制			
過去	16例	16.7%	うち、「was going to + 不定詞」が1例
法助動詞過去	6例	6.3%	couldが4例、wouldが2例
現在	4例	4.2%	
過去完了	3例	3.1%	
(B)　MRで半過去に訳されたMEの定形動詞（67例）の時制			
過去	57例	59.4%	うち、「was going to + 不定詞」が1例
法助動詞過去	7例	7.3%	wouldが4例、couldが2例、shouldが1例
過去完了	3例	3.1%	

英語の間接話法の例文 (1) に太字で示したような過去形（was）が、ルーマニア語では現在形（(3) の este）に訳し得るということ、また、ルーマニア語では、例文 (5) a と (6)a の太字に見るように、同じ間接話法の文脈において現在形（e）に限らず半過去（era）の選択も（無標、有標の差はあれ）可能であるということ、これらを考え合わせると、MR 版では、(A) の現在形、(B) の半過去とも、ME の過去形が翻訳されたものだろうと予測するのがもっとも自然であるように見える。事実、MR が現在形で訳されていようと、半過去で訳されていようと、ME の元の時制のうち、**表 2** でいちばん高い割合を示すのが過去形であることは間違いない。現に、ME 過去形の MR への翻訳が (B) の半過去になる割合は、総数の 59.4% と、過半数を占めているし、(A) の現在形になる割合も、16.7% と、かなり数値は下がるにしろ、**表 2** 中では前者に次ぐ結果となっている。次にあげるのは、(8) が後者の現在形、(9) が前者の半過去に訳された例である。[16]

(8)　R.　Fiica dumneavoastră v-a spus [PC] întocmai că Sandford **este** [PRES] responsabil pentru situaţia ei? (MR, p. 258)

E.　Your daughter distinctly told you that Mr Sandford **was** responsible for her condition? (ME, p. 298)

「娘さんがあんたに、娘さんの妊娠はサンドフォードに責任があると、まさしくそう言ったのかね？」（*cf.* MJ, p. 417）　4801

(9)　R.　Doamna Dacre spusese [PQP] însă că ei nu îi **era** [IMP] frig (MR, p. 73)

[16] パラレルコーパスから引用した例文は、その通し番号を□で囲んで示す。この番号は、例文と和訳を提示したのち、それらすべての末尾に置く。なお、和訳は、MJ を参考にはするが、できるだけルーマニア語の例文の内容に近いものにする。

E. Mrs Dacre, however, had said it **was** not too cold for her (ME, p.82)
「けれども、ミセス・デイカーは、自分は寒いとは思わないと言っていました」（*cf.* MJ, p. 108） 1097

一方、量的には**表2**中いずれも最低ではあるが、MEの過去完了が3例ずつ(A)の現在形と(B)の半過去とに翻訳されている。(A), (B)から1例ずつあげてみよう。

(10) R. Poliţiştii au spus [PC] că nu **au** [PRES] suficiente dovezi împotriva lui (MR, p. 235)
E. The police said they **had**n't really **got** enough against him (ME, p. 271)
「警察は、彼が不利になる十分な証拠はないと言いました」（*cf.* MJ, p. 378） 4224

(11) R. I-am răspuns [PC] pe un ton rece că, probabil, aşa **gândeau** [IMP] majoritatea criminalilor (MR, p. 151)
E. I replied drily that possibly several criminals **had thought** that in their time (ME, p. 173)
「私は彼女にそっけなく、おそらく多くの犯罪者がそんなふうに考えてきたんだろうと答えました」（*cf.* MJ, p. 235） 2490

ME版で過去完了に置かれている(10)Eと(11)Eの動詞を元の話者の時制に立ち返って言い直してみると、それぞれ、we **have**n't really **got** enough against him「彼を不利にできるようなちゃんとした裏付けがない」、several criminals **have thought** that「かなりの犯罪者がそう考えてきた」と、いずれも現在完了に置き換えることができる。つまり、上の英語の例文中に太字で示した過去完了は、元の発話中の現在完了が間接話法で過去に向かって移し替えられた結果であり（Comrie, 1986, pp. 289-290参照）、そのため、主節における過去を基準点として、その結果や状態の継続などを表すことになる。もう一方のルーマニア語であるが、このような（部分的にしろ）主節との同時関係を示し得る条件下では、ME版の過去完了は、(10)Rと(11)Rに見るように、現在形や半過去に訳されてよいようである。その具現を示すのが、**表2**の(A), (B)のリスト中でそれぞれ3.1%ずつを占めるMEの過去完了である。

ここまで、①として、ルーマニア語の現在形と半過去を同時関係という観点からのみ扱ってきたが、すでに述べたとおり、これら2つの時制には、過去を基準点としながら後続関係つまり「過去から見た未来」を表すはたらきもある（例文(5)cを参照）。英語の過去未来を表す法助動詞過去を使った迂言形式がMRで(A)の現在形や(B)の半過去に訳されているのは、こうした理由によるものである。MEの法助動詞過去wouldによる迂言形式がMRで半過去に訳された例を1つあげておく。

(12) R. Simţeam [IMP] că nu prea îl **lua** [IMP] în serios pe domnul Sanders în proaspătul său rol de văduv disperat (MR, p. 198)
E. I felt that he **would**n't **take** Mr Sanders in the rôle of the bereaved widower

too seriously (ME, p. 227)
「私は、彼ならサンダーズの絶望し切った男やもめぶりを額面どおりに受け取りはしないだろうと感じていました」（*cf.* MJ, p. 314） 3437

また、**表 2** の「備考」にあるように、(A), (B) ともに、オリジナルの ME の過去形が「was going to + 不定詞」という迂言形式を（各 1 例ずつに過ぎないが）含んでいるのも、同じ理由による。次の例は、この形式がMRで現在形に訳されたもの。

(13) R. Amy a zis [PC] că mai **înoată** [PRES] puţin (MR, p. 145)
E. Amy said she **was going to swim** out once more (ME, pp. 165-166)
「エイミは、もう少し泳いでくると言いました」（*cf.* MJ, p. 225） 2373

ところで、Comrie は、**引用 1** で提示した英語の時制の一致の規則をさらに精密化し、但し書きを添えて「改正バージョン（revised version）」としている。それによれば、「伝達動詞の時制が過去であれば、元の発話の時制は過去に向かって移し替えられる（if the tense of the verb of reporting is past, then the tense of the original utterance is backshifted into the past）」（Comrie, 1986, pp. 284-285）という規則には例外があり、その例外とは、「間接話法の内容が引き続き効力をもったままなら、過去に向けた移し替えは随意だ（if the content of the indirect speech has continuing applicability, the backshifting is optional）」（*ibid.*, p. 285）というものである。たとえば、例文 (1) の太字（was）を現在形（is）に変えた場合、

(14) Andrew said that he **is** sick

アンドルーの言った「自分が病気である」という状態は、(14) の発話時点でも依然として有効でなければならないので、(1) のように although he now claims to be better「が、今は気分が良いそうだ」と続けることはできない（Comrie, 1986, p. 285 を参照）。つまり、英語の間接話法の従属節中で現在形が使われる場合は、その内容が発話時点においても効力をもったままでなければならないということである。事実、**表 2** 中でオリジナルの ME に見つかる現在形 4 例は、すべてこうした性質を備えたものである。次はそのうちの 1 例。

(15) R. De aceea am spus [PC] că femeile de o anumită vârstă **seamănă** [PRES] între ele (MR, p. 158)
E. That's what I meant by saying that one lady of a certain age **looks** so like another (ME, p. 180)
「だから、私は、ある年齢の婦人は皆似たり寄ったりだと言ったのです」（*cf.* MJ, p. 245） 2629

上に紹介した、過去への移し替えが随意的だという Comrie の但し書きは、英語では現在形、過去形いずれの選択も許されることを意味する。実際、上の (15)E が現在形の例なら、次の (16)E, (17)E は過去形が選択された例である。

(16) R. n-aţi spus [PC] dumneavoastră că **este** [PRES] deseori prescrisă pentru bolile de inimă? (MR, p. 223)

E. you did say that it **was** often prescribed for heart trouble? (ME, p. 257)
「あなたは、それが心臓病の特効薬としてよく処方されるとおっしゃいませんでしたか？」（*cf.* MJ, p. 358） 4003

(17) R. I-am răspuns [PC] că **era** [IMP] o întrebare dificilă, dar că, în general, nu **agream** [IMP] o astfel de soluţie. Legea **era** [IMP] lege şi **trebuia** [IMP] să i ne supunem (MR, p. 151)

E. I replied that that **was** rather a difficult question, but that on the whole, I **thought** not. The law **was** the law, and we **had** to abide by it (ME, p. 173)
「私は彼女に、それは難しい問題だ、けれども、全般に自分としてはそんな解決法は感心しない、と答えました。法は法だ、従うことが必要だとね」（*cf.* MJ, p. 235） 2485-2486

(17)E は、ある女性に Do you think [...] that one is ever justified in taking the law into one's own hands?「人間が自分の手で法を行使するのは正しいことだとお思いでしょうか？」（ME, p. 173; *cf.* MJ, pp. 234-235） 2484 と尋ねられた主人公の答えが間接話法で伝えられたものだが、太字の 4 動詞を含む表現のうち、I thought not「自分としてはそうは思わない」は元の発話時の判断として差し引いて考えるにしても、他の 3 動詞による表現は、(16)E の薬の処方の場合と同様に、元の発話時にとどまることなく、普遍的とも言える妥当性がある。

ここで、観点をルーマニア語に移そう。従属節の内容が発話時点においても有効な場合には、ルーマニア語でも、現在形と半過去の選択は随意的だと言えるのかもしれない。現在形の選択が可能なのは (15)R, (16)R を見ればわかるが、現在形が無標の選択であることを考えれば、これはむしろ当然である。一方、半過去の可能性に関しては、(17)R で確かめることができそうである。[17] そうであれば、伝達時に間接話法の内容が依然として有効な場合は、ルーマニア語でも英語同様に、2 つの時制の選択が随意であると言えることになるだろう。しかし、もしそうなら、この条件下にある ME の現在形や過去形は、MR では、現在形、半過去のどちらにも訳され得るはずである。ところが、**表 2** で (A) と (B) のリストを比べてみると、特に ME の現在形は、(A) で 4 例が MR 現在形に訳されているのに対し、(B) で MR 半過去に訳された例は皆無

[17] (17)R は（(17)E と同様に）ピリオドで区切られ、大きく 2 つの文に分かたれる。最初の文は伝達動詞 am răspuns「私は答えた」に導かれた間接話法、後半は（伝達動詞も接続詞もない）独立節による自由間接話法である（ルーマニア語の自由間接話法の定義に関しては、GBLR, pp. 647-648 参照）。したがって、後半の文に出てくる 2 つの半過去は、**表 2** (B) の数値には反映されていない。

である。この (B) における不在は、ルーマニア語における半過去の選択が有標であることを考え合わせれば、むしろ順当な結果だと言った方がより真相に近いのではないだろうか。Zafiu は、上に引いた**引用 3** 中で、彼女自身の例文（下に再録）に関して「例 (6)a からは、『彼がもはやいらだっていない』ことが推測できる（From example (6a) it can be inferred that ‘he is not upset anymore’）」(Zafiu, 2013, p. 64) と言っている。

(6) a. Mi-a spus [PC] că **era** [IMP] supărat
「彼は、自分がいらだっていると私に言った」

これに従えば、補足節に半過去が使われた場合は、その内容が発話時にはもはや当てはまらないと推測できる、というのだから、(17)R のような文はむしろ例外的であり、英語のオリジナルの存在なしでは考えられないものなのかもしれない。

さらに、もう 1 つ付け加えておきたいのは、**表 1** の MR 現在形 46 例のうち、英語オリジナル版における何らかの対応不足（脚注 14 参照）が原因で、**表 2**(A) の MR 現在形 29 例中から外れてしまった例文のなかにも、明らかにルーマニア語の間接話法における無標の選択が反映しているものがある、ということである。それは、ルーマニア語が自発的に間接話法を使った結果であると言えよう。

(18) R. mi-a spus că **vrea** să întocmească un nou testament
CL.DAT.1SG-has told that wants SĂ draw up.S.PRES.3SG a new will
(MR, p. 79)
E. [Simon Clode] instructed me to draw up a new will (ME, p. 91)
「［サイモン・クロードは］私に、新しい遺言状を作りたいと言いました」（*cf.* MJ, p. 119） 1206

(19) R. El ne-a spus că **sunt** patru suspecţi (MR, p. 173)
he CL.DAT.1PL-has told that are.3PL four suspects
E. He said four suspects (ME, p. 198)
「彼は私たちに、容疑者が 4 人いるとおっしゃいましたわ」（*cf.* MJ, p. 272） 2929

オリジナルの (18)E では、ルーマニア語の補足節に対応する動詞が to 不定詞だし、(19)E は動詞自体を欠いている。このように英語版の時制に引きずられる恐れのない場合、支配節との同時関係を表すのに補足節に無標の現在形が使われているのは、注目に値する（脚注 14 中の例文 (i) の現在形も同様である）。

5.2. 先行関係

次に、②の先行関係を調べてみよう。**表 3** は、**表 2** と同じ要領で、MR に訳された②の複合過去と大過去が、それぞれ、元の ME のいかなる時制を翻訳したものなのかを示したものである。ME の個々の時制がどれぐらいの頻度で MR の複合過去や大過

去に翻訳されるのかは、それぞれ(A), (B)のリストに示してある。

表３　②先行関係：MR で複合過去、大過去に訳された元の ME の時制

MEの時制	出現数(計74例)	計74例中の割合	備考
(A)　MRで複合過去に訳されたMEの定形動詞（11例）の時制			
過去	6例	8.1%	
過去完了	4例	5.4%	
法助動詞過去	1例	1.4%	wouldが1例
(B)　MRで大過去に訳されたMEの定形動詞（63例）の時制			
過去完了	39例	52.7%	
過去	24例	32.4%	

英語の間接話法の例 (2) の前半に太字で示したように過去完了（had kissed）が②の先行関係を示すとき、ルーマニア語では複合過去（(4) 前半の a sărutat）に訳せるということ、かつ、ルーマニア語では、例文 (5)d と (6)c の太字に見るように、同じ間接話法の文脈において複合過去（a lipsit）に限らず大過去（lipsise）の選択も可能であるということ、これらのことだけからすると、MR 版では、(A) の複合過去、(B) の大過去とも、ME の過去完了が翻訳されたものだろうと予測できそうに見える。確かに、**表 3** では、ME 過去完了の MR への翻訳が (B) の大過去になる割合は、総数の 52.7% と、過半数を占めているが、同じ(B)のリスト内にあって、ME 過去形も、MR 大過去に訳される確率が 32.4% と、その割合はかなり高い。一方、リストの (A) に目を移すと、MR で複合過去に訳された文の数自体が 11 例と、もともとあまり多いわけではないが、このうちでME過去完了を訳したものは、**表3**全体の 5.4 %に当たる 4 例に過ぎず、むしろME過去形からの訳の方が6例で8.1%と多い。この結果は、実は、次に Comrie が述べているような、英語間接話法の時制の選び方の重複に起因していると考えられる（引用中の例文番号は本文の通し番号に合わせる。例文中の太字も筆者）。

引用5 “Corresponding to the direct speech of (20), there are two indirect speech correspondents, one with the simple past and one with the pluperfect:

(20)　Yesterday, Wendy said, ‘I **arrived** yesterday.’

(21)　Yesterday, Wendy said that she **arrived** the day before yesterday.

(22)　Yesterday, Wendy said that she **had arrived** the day before yesterday.

There are undoubtedly stylistic differences between (21) and (22), with many stylistic purists preferring (22), but in actual usage it is clear that both possibilities exist.” (Comrie, 1986, p. 291).

(21) の例は、支配節が過去に置かれた英語の間接話法では、②の先行関係を表す場合でも、従属節に（標準的な過去完了以外に）過去形も使えることを示している。次の例は、この用法による ME の過去形が、MR の複合過去 (23)R と大過去 (24)R とに訳されたものである。

(23) R. am auzit [PC] că cei trei **au avut** [PC] la cină tartă (MR, p. 26)
E. I heard that they **had** trifle for supper (ME, p. 25)
「私は、3 人が夕食にトライフルを食べたということを聞きました」（*cf.* MJ, p. 34） 224

(24) R. Ea a jurat [PC] că vehiculul nu **fusese** [PQP] scos din garaj în noaptea cu pricina (MR, p. 61)
E. she swore that in actual fact it never **left** the garage that night (ME, p.68)
「彼女は、その夜車がガレージから出されることはなかったと誓いました」（*cf.* MJ, pp. 87-88） 877

(21) と (22) で見たように、英語では②の先行関係を過去形と過去完了のどちらでも表せるというのだから、これら 2 つの時制をルーマニア語に翻訳するとすれば、②の条件下では、複合過去にでも大過去にでも随意に置き換えられということになる。いま、**表 3** の (A) と (B) における MR の複合過去と大過去の使用に量的な大差がある理由については留保しておくとしても、それとは別に 1 つ気づくことがある。それは、**表 3** の (A), (B) のリスト全体で、ME の過去形と過去完了がそれぞれ MR の複合過去か大過去かに訳されるとき、その確率が最高と最低の値を示すのはいずれもオリジナルが過去完了の場合だということである。[18] その最高の値を示すのは、**表 3** 中で 52.7% を占める (B) の MR 大過去であり、逆に、最低の値は 5.4% しかない (A) の MR 複合過去である。このように MR の 2 つの時制への訳の量的な開きが極端なのは、どうやら、英語とルーマニア語で共通して「過去から見た過去」を表すのがそれぞれ過去完了と大過去である、という対応関係に原因が求められそうである。すなわち、英語に②の先行関係を表す過去完了が出現した場合、ルーマニア語訳の際に選ばれやすいのは、むしろ対応関係のはっきりした大過去の方であり、逆に、無標の選択であるはずの複合過去は、結局、その出番を大きく大過去に譲ってしまうことになるのではないだろうか。実は、上にあげた (23)E にはさらに従属節がもう 1 つ続き、そこに過去完了（進行形：had been writing）が出てくる。

---

[18] **表 3**(A) には、ME の法助動詞過去 would による迂言形式が MR で複合過去に訳されている文が 1 例だけ見つかるが、これは誤訳の可能性が高い。

(i) R. am crezut [PC] că **aţi observat** [PC] şi voi (MR, p. 172)
E. I thought you**'d notice**! (ME, p. 197)
「奥様ならきっと、気がおつきになると思いましたのよ」（MJ, p. 270） 2902-2903

ここにあげた和訳は、筆者が手を加えることなく、MJ からそのまま引用したものである。この和訳からもわかるとおり、ME で過去未来を表す would notice を、MR では過去完了の had noticed として訳してしまったらしい。したがって、上の例 (i) は、**表 3** を考察する際の考慮には入れない。

(25) R. am auzit [PC] că cei trei **au avut** [PC] la cină tartă şi că soţul **scrisese** [PQP] cuiva despre “sute şi mii” (MR, p. 26)

E. I heard that they **had** trifle for supper and that the husband **had been writing** to someone about hundreds and thousands (ME, p. 25)
「私は、3 人が夕食にトライフルを食べたということ、夫が誰かにあてて、ハンドレッズ・アンド・サウザンズうんぬんと書いたということを聞きました」（*cf.* MJ, p. 34） 224

このME 過去完了は、MR 版では趨勢に従うかのように大過去（scrisese）に訳されており、これと、(23) で見たME 過去形（had）からMR 複合過去（au avut）への訳とを突き合わせて考えてみると、MR 版は形式上のこの区別をことさら残そうとしているかのようにさえ見える。[19] MR の翻訳版に ME オリジナルの 2 つの時制の違いが反映していることを否定するのは難しいであろう。

(25)R が英語オリジナルの時制の形式的な違いに引きずられた例だとすれば、一方、次にあげる (26)R は、（(18)R, (19)R と同様に）英語版に引きずられる恐れのない文脈中での自発的な間接話法の例だと言える。

(26) R. Am auzit că Sanders **a hoinărit** primprejur (MR, p. 195)
have.1SG heard that Sanders has wandered around

E. Sanders, I hear, wandered out into the grounds (ME, p. 224)
「私は、サンダーズがあちこち歩き回っていたと聞きました」（*cf.* MJ, p. 310） 3377

オリジナルの (26)E は、元の発話をそのまま伝達する直接話法であり、ここで伝達動詞の役割を果たしているのは、途中に挿入された知覚動詞「私は［うわさで］聞いている（I hear）」である。ルーマニア語版は、これを間接話法に転換しており、そこに無標の複合過去（a hoinărit）が選ばれているのは、やはり注目すべきことである（脚注 14 の例 (ii), (iii) の複合過去も同様）。

5.3. 後続関係

最後は、③の後続関係である。**表 4** は、**表 2**, **3** と同じ要領で、MR に訳された③の未来形と過去未来形が、それぞれ、元の ME のいかなる時制を翻訳したものなのかを示したものである。ME の個々の時制がどれぐらいの頻度で MR の未来形や過去未来形に翻訳されるのかは、ここでも (A), (B) のリストに示してある。

---

[19] ちなみに、フランス語の翻訳版では、2 つの従属節の動詞はいずれも大過去で訳されている。

(i) j’ai appris [PC] qu’ils **avaient eu** [PQP] du pudding au dîner et que le mari **avait écrit** [PQP] une lettre à propos de centaines et de milliers (MF, p. 25) 224

状況はイタリア語版（MI, p. 15）やスペイン語版（MS, p. 272）にとっても同じことで、これは、西側のロマンス諸語がもつ時制の一致の制約に起因するものだと考えられる。

表４　③後続関係：MR で未来形、過去未来形に訳された元の ME の時制

MEの時制	出現数 (計26例)	計26例中の割合	備考
(A)　MRで未来形に訳されたMEの定形動詞（22例）の時制			
法助動詞過去	20例	76.9%	wouldが16例、shouldが2例、couldが1例、mightが1例
過去	2例	7.7%	うち、「was going to + 不定詞」が1例
(B)　MRで過去未来形に訳されたMEの定形動詞（4例）の時制			
過去	3例	11.5%	
法助動詞過去	1例	3.8%	wouldが1例

英語の間接話法の例 (2) の後半に太字で示したように法助動詞過去による迂言形式（would kiss）が③の後続関係を示すとき、それに対応するルーマニア語が (4) の文後半の未来形（va săruta）であることを考えると、MR 版において、**表 4** (A) の未来形は ME の法助動詞過去形の表現が翻訳されたものであろうと予測するのはごく自然なことであろう。事実、**表 4** では、(A) の MR 未来形が ME 法助動詞過去形（の迂言法）から訳されたものである確率は極めて高く、総数の 76.9% にも上る。下にあげた (27)R は、そうした 20 例のうちの 1 つである。一方、例文 (5)b と (6)b の太字で見たように、ルーマニア語の間接話法における同様の文脈中では、未来形（va pleca）に限らず、過去未来を表す迂言形式（avea să plece）の選択もまた可能なはずである。[20] にもかかわらず、ME の法助動詞過去による迂言形式が (B) の MR 過去未来形で訳されている例は、唯一 (28)R が存在するのみである。[21]

(27) R.　ştiam [IMP] că nu **va putea** [FUT] să-i facă faţă lui Geoffrey (MR, p. 112)
　　E.　I knew she **would**n’t **be** able to stand up against Geoffrey (ME, p. 127)
　　「彼女がジェフリーに抵抗できるわけがないことはわかっていたよ」（*cf.* MJ, p. 169）　1768

(28) R.　Ea a notat [PC] pe un calendar când **urma să fie** [FdP] lună plină (MR, p. 125)
　　E.　She marked off on a calendar the day when the moon **would be** full (ME, p. 144)
　　「彼女は、カレンダーにいつが次の満月かを書き留めました」（*cf.* MJ, pp. 192-193）　2028

[20] (5)c も（(5)b, (6)b と同様に）選択可能であるが、ME 法助動詞過去形の迂言法が MR 現在形や半過去に訳される場合については、①の同時関係に並行させて、すでに 5.1 節で扱った（たとえば、(12) 参照）。

[21] (28)E の when が導いているのは関係節であるが、(28)R の când「いつ」は、十分に間接疑問文（つまり補足節）を導いていると考えることができる。

③の後続関係の場合、MR 翻訳版では、ME オリジナル版が法助動詞過去形を用いて過去未来を表すのに引きずられることなく、MR 未来形の方が MR 過去未来形を抑えて圧倒的に多く現れるわけだが、これは、未来形が無標の選択であることを考えると、当然かもしれない。しかし、すでに見たように、①同時関係や②先行関係が MR 版に翻訳される場合には、③とは裏腹に、英語の時制の一致の規則に引きずられて、有標の選択であるはずの半過去や大過去の方が高い確率で現れることを考慮に入れれば、ルーマニア語における過去未来形の選択の回避傾向には何らかの別の要因が強く作用していると考えられる。そうした要因として、AVEAM SĂ 型や URMA SĂ 型過去未来形の文法化が進んでいないという現象（**引用 4** 参照）があげられよう。[22] 本稿では、これらの迂言形式を「過去未来形」と称して他の時制と同列に扱ってきたが、すでに断ったとおり、それは煩雑さを避ける便宜上のことに過ぎず、実際は、これらの形式はルーマニア語の時制体系のなかで周辺的な価値しかもっていない。こうした文法化の不完全さが、英語オリジナルの時制一致の規則に引きずられるのを抑制する大きな要因になっている、と考えることは十分に可能であろう。

(28)R が孤立した例になっているからと言って、MR 版の翻訳者がことさら過去未来形の選択を避けようとしているわけではない。それは、**表 4** (B) のリストで、ME 過去形から訳された場合も合わせると、間接話法の補足節中での MR 過去未来形の使用がさらに 3 例増えることからもうかがえる。一方、ME 過去形が MR 未来形に訳されたものは、(A) のリスト中では 2 例しか見当たらない。次の (29) と (30) は、ME 過去（進行形：was going、脚注 22 も参照のこと）がそれぞれ MR 未来形と MR 過去未来形とに訳し分けられた例である。

(29) R. ea îi spuse [PS] că **va merge** [FUT] să-şi viziteze sora la Golders Green (MR, p. 119)
E. she mentioned that she **was going** to see a sister at Golders Green (ME, p. 136)
「彼女は、妹を訪ねてゴールダズ・グリーンに行くんだと、彼に言いました」（*cf.* MJ, p. 182） 1892

---

[22] たとえば、下の (i)R の太字は、AVEAM SĂ 型過去未来形に置かれているが、その助動詞には、必要性を示す元来の叙法的意味が透けて見えてくる（和訳参照）。対応する英語 (i)E の動詞（太字部分）が単なる過去形であることにも注意。

(i) R. îl anunţase [PQP] că **avea să-i spună** [FdP] ceva extrem de important (MR, p. 153)
E. She [...] had told him that she **had** a communication of the gravest importance to make to him (ME, p. 175)

「彼女は、彼に言うべき極めて重大なことがあると告げたのだった」（*cf.* MJ, p. 237） 2515

文法化の不完全さが認められる例は英語にも見つかる。たとえば、のちに見る本文の (29)E だが、過去未来を表す **was going to see** a sister における was going to には、その再分析が起こる前の、本来の移動を表す動詞 go の意味が残されているように見える（『明解言語学辞典』pp. 199-200「文法化」の項参照）。

(30) R. Mă întrebam [IMP] dacă şi ea **urma să meargă** [FdP] la Penrithar (MR, p. 72)
E. I wondered whether she too **was going** to Penrithar (ME, p. 81)
「私は、彼女もまたペンリサーに行くのかしらと自問していました」（*cf.* MJ, pp. 107-108） 1087

ルーマニア語の未来形と過去未来形のどちらが選ばれるかに関しては、Uricaru が、その選択が伝達者に委ねられることを示唆している。

引用6 "Folosirea celor două posibilități de indicare a posteriorității în Trecut: Viitorul deictic şi Perifraza cu Impf., pare să nu se supună unor reguli de distribuție diferențiată. Opțiunea pare să depindă numai de locutor, care decide asupra perspectivei din care evenimentele vor fi considerate (Uricaru, 2003, p. 190).
「過去における後続関係を示すのに、直示未来形および半過去による迂言法［つまり過去未来形］という2つの使い分けが可能だとしても、それは、2つの分布を区別するような規則によるものではないように見える。どちらを選択するかは、単に伝達者に委ねられているだけのようである。伝達者により、どの視点で出来事が考慮されるかが決まるのである」（点線アンダーラインは筆者）。

すでに見たように、ルーマニア語の過去未来形が「とりわけ文学的で格調高い書きことばの使用域にとどまっている（Réservées au registre écrit soutenu, surtout littéraire）」（Timoc-Bardy, 2013, p. 59, note 13）にしろ、問題の未来形か過去未来形かの選択は、Uricaru の指摘どおり、最終的には伝達者（我々の場合は翻訳者）に委ねられているように見える。このことは、前に見た(27)の補足節が現れるもっと広い文脈を見てもわかる。

(31) R. Mabel este fată bună, mi-a ţinut partea, dar ştiam [IMP] că nu **va putea** [FUT] să-i facă faţă lui Geoffrey. În cele din urmă, **avea să procedeze** [FdP] tot cum îl tăia capul (MR, p. 112)
E. Mabel is a good girl – Mabel stuck up for me, but I knew she **would**n't **be** able to stand up against Geoffrey. In the end he **would have** his own way (ME, p. 127)
「メイベルはいい子だ。わしの味方に立ってくれたからな。しかし、ジェフリーに抵抗できるわけがないことはわかっていたよ。結局のところ、やつが思いどおりに事を進めてしまうだろうってな」（*cf.* MJ, p. 169） 1768-1769

ME オリジナル版の太字の 2 か所はいずれも法助動詞過去（would）による迂言形式であるが、MR 翻訳版では、これが、(27) では未来形（va putea）に訳されているの

に対し、さらに続けて作中人物の「わし」がわかっていた内容を独立節で表す自由間接話法では、過去未来形（avea să procedeze）に訳し分けられている。ルーマニア語の（過去の文脈中での）自由間接話法では未来形も十分に出現し得ることを考え合わせるならば（Mancaş, 1972, pp. 89-90 参照）、(31)R に太字で示した 2 つの異なった時制の使用は、翻訳者の個人的な選択によるものだと考えてもいいだろう。

6. むすび

これまで検討してきたことをまとめるに当たり、**引用 6** で述べた内容に対して、Uricaru 自身が次のような但し書きを添えていることから見ておこう。

引用 7 “Este, totuşi, evident că utilizarea Viitorului este mult mai frecventă, la fel cum pentru celelalte raporturi există o preferinţă pentru formele deictice (netranspuse)” (Uricaru, 2003, p. 190).
「それでも、［過去未来形に比べて］未来形を利用する頻度の方がずっと高いのは明らかである。それは、ちょうど、他の［①同時、②先行］関係を表すのに（過去への移し替えのない）直示形式が好まれるのと同じである」。

これによれば、ルーマニア語では、過去の文脈中で①同時関係、②先行関係、③後続関係を表すのに、それぞれ現在形、複合過去、未来形という直示時制が無標の選択として好まれる、ということになる。したがって、もしオリジナルがルーマニア語で書かれているテクストを分析すれば、これら 3 つの時制が高い頻度で出現する可能性が十分に考えられる。ところが、我々が英語からの翻訳版 MR を分析してみたところ、**表 1** で見たように、少なくとも①同時関係、②先行関係については、Uricaru が言うのと逆の結果を得た。その原因を探るために、我々は、①～③それぞれの英語オリジナル版 ME との時制の対応関係を洗い出し、その対応関係を表す数値を**表 2** ～ **4** に示した。

我々は、これらの数値に基づいて細かい分析を進めてきたが、この分析の結果は、大まかに見ると次の 3 点にまとめられる。これら 3 点が我々の結論である。

（1）英語の時制一致の規則により、ME の従属節に過去形を使う①同時関係と、過去完了を使う②先行関係の場合は、MR では、その形式に合わせるかのように、それぞれ半過去、大過去に訳している例が半数以上あった（順に**表 2** 中の 59.4%、**表 3** 中の 52.7%）。我々は、ルーマニア語の無標の選択から大きく外れるこの結果を、翻訳の際に英語の時制形式に引きずられたものである、と判断した。

（2）ME の従属節に過去未来を表す法助動詞過去形の迂言法が現れる③後続関係の場合には、MR では、上の（1）の結果とは裏腹に、過去未来形を抑えて未来形の使われる比率が大きく上回っていた（**表 4** 中の 76.9%）。我々は、無標の選択が英語の形式に引きずられることなく幅をきかしている原因を、AVEAM SĂ 型、URMA SĂ 型過去未来形の文法化の不完全さに求めた。

（3）我々は、5.1 節と 5.2 節の各最終段落で、英語オリジナル版の時制に引きずられる恐れのない文脈においては、Uricaru が**引用 7** で言っているとおり、ルーマニア語版では③の関係ばかりでなく「他の関係を表すのに [も]（過去への移し替えのない）直示形式が好まれる（pentru celelalte raporturi există o preferință pentru formele deictice (netranspuse)）」ことを見た。太字で示した (18)R, (19)R の現在形、(26)R の複合過去がそうした直示形式である（さらには、脚注 14 中の (i) の現在形、(ii), (iii) の複合過去も同様）。このことは、中立的な状況にさえあれば、過去の文脈中におけるルーマニア語の補語節の時制には、やはり無標の選択が好まれることを物語っている。

文献一覧

【テクスト】

『火曜クラブ（*The thirteen problems* 別題：*The Tuesday Club murders*）』

ME：（英語版）Agatha Christie, *The thirteen problems*. London, Harper Collins Publishers, 2002.

MF：（フランス語版）Agatha Christie, *Miss Marple au Club de mardi*, trad.: Sylvie Durastanti. Paris, Éditions du Masque, 2013.

MI：（イタリア語版）Agatha Christie, *Miss Marple e i tredici problemi* (Oscar gialli), trad.: Lydia Lax. Milano, Arnoldo Mondadori Editore, 1989.

MJ：（日本語版）アガサ・クリスティー『火曜クラブ』中村妙子訳　東京 早川書房 2003

MR：（ルーマニア語版）Agatha Christie, *13 [treisprezece] probleme*, trad.: Cristina Mihaela Tripon. București, Editura RAO, 2014.

MS：（スペイン語版）Agatha Christie, *Miss Marple y trece problemas*, trad.: C. Peraire de Molino. Barcelona, Debolsillo, 2003.

【参照文献】

Begioni, L. & A. Rocchetti (2013): *Comprendre la concordance des temps et son évolution comme un phénomène de déflexivité: d'une concordance, élément actif de la syntaxe (italien, français classique) à une concordance en cours de réduction (français d'aujourd'hui)*, in "Langages", 191, pp. 23-36.

Călărașu, C. (1992): *Quelques significations des temps verbaux roumains en perspective romane (avec applications aux langues roumaine et française)*, in "Revue roumaine de linguistique", 37, pp.137-143.

Carabulea, E. (2008): *Complementul secundar*, in GALR, vol. 2, pp. 413-417.

Comrie, B. (1985): *Tense*. Cambridge, Cambridge University Press.（和訳：『テンス』東京 開拓社 2014）

Comrie, B. (1986): *Tense in indirect speech*, in "Folia linguistica", 20, pp. 265-296.

ELR: M. Sala (coord.), *Enciclopedia limbii române*. Bucureşti, Univers Enciclopedic, 2001.

GA: Academia Republicii Populare Romîne, *Gramatica limbii romîne*, vol. 1-2. Bucureşti, Editura Academiei, 1963[2].

GALR: Academia Română, Institutul de Lingvistică "Iorgu Iordan - Al. Rosetti", *Gramatica limbii române*, vol. 1-2. București, Editura Academiei Române, 2008.

GBLR: G. Pană Dindelegan (coord.), *Gramatica de bază a limbii române*. București, Univers Enciclopedic Gold, 2010.

Mancaș, M. (1972): *Stilul indirect liber în româna literară*. București, Editura Didactică și Pedagogică.

Manea, D. (2008): *Timpul*, in GALR, vol. 1, pp. 394-448.

『明解言語学辞典』：斎藤純男他編『明解言語学辞典』東京 三省堂 2015.

Popescu, M. (2014): *'Viitorul în trecut' în limba română contemporană: un punct de vedere semantico-pragmatic*, in "Revista de Filología Románica", 31, 1, pp. 111-125.

Timoc-Bardy, R. (2013): *Le roumain: une langue "sans concordance des temps"?*, in "Langages", 191, pp. 53-66.

Uricaru, L. (2003): *Temporalitate și limbaj*. București, Allfa.

Vântu, I. (2008): *Vorbirea directă și vorbirea indirectă,* in GALR, vol. 2, pp. 859-868.

Vasiliu, L. (1963): *Verbul,* in GA, vol. 1, pp. 202-299.

Zafiu, R. (2013): *Mood, tense, and aspect*, in G. Pană Dindelegan (ed.), *The grammar of Romanian*, Oxford, Oxford Univ. Press, pp. 24-65.